高等学校における「いのちの教育」の実践的研究・第二報

大宮美智枝・落合　優

A Practical Report on "Life-Education" in a High School (Ⅱ)

Michie Ohmiya, Masaru Ochiai

抄　録

本研究は、学校教育における「いのちの教育」の有効性とその実践方法を検討するものである。筆者が提唱する「いのちの教育」とは、人とのかかわりの中から、かかわりを肯定的に捉えライフスキルを養う健康教育をさす。

第一報では、高校生の対人認知の実情を捉えるため「高校生のかかわり尺度」を開発した。Rosenbergの自尊感情尺度から「高校生のかかわり尺度」が自尊感情の説明変数となることが検証でき、人とのかかわりから学習を進め自尊感情の高揚を目的とする「いのちを考える」授業は、その尺度を活用し有効性を明らかにすることができた。具体的には、自尊感情に関連しては家族との関係性が有意に高く、授業は家族のいのち・他者のいのちに焦点を置いて考えさせることの有効性が示された点である。

しかし、実際の教育現場では、友人の評価を重要視する生徒の動向を目の当たりしている。高校生の友人の認知と家族とのかかわりの関係性、及び授業の方向性をさらに検討するため、追加調査を行い検討を行った。分析の結果、「高校生かかわりの尺度３」では、前回の調査を概ね支持する結果となり、内的整合性がみられる16因子（74項目）が抽出できた。また、肯定的な自尊感情とは、家族のかかわりが決定要因となる点については前回の結果を支持した。今回の調査では、自分の存在観について否定的な者は、学内友人が否定的なかかわりとの関係性があることが示唆された。

今後に展開する「いのちの学習」では、友人とのかかわりに注目しがちなかかわりを、広い視野で捉えられるような支援と、家族や周囲のいのちに焦点をあてたカリキュラムを充実させると共に、ライフスキルを獲得できるようなかかわり合いの場としての機能が重要であると考えられた。

Ⅰ　はじめに

近年、高校期にあたる青少年の凶悪事件が頻繁に報道され社会問題として注目を集め、そうした背景からも、「いのちの教育」への関心が高まってきている。筆者は、1990年度から保健の授業の中で「生教育」と名付けて高校の教育現場での実践を行ってきた。[1] また、2000年度からは学校設定科目に「いのちを考える」授業を開講した。そこで2001年度にこれまでの授業実践が健康教育として有効であったのかをアセスメントし、さらなる授業効果や新たな課題発見を目的とし調査検討を行った。[2] 調査は神奈川県内の高校生2200名を対象に高校生の人とのかかわりの実態調査から「高校生のかかわり尺度」を開発するとともに、「いのちを考える」授業選択者に対して授業前後で生徒

の自尊感情とかかわりの認知の変容と、授業観察から授業効果の検証を目的として行なわれた。[3)]

前回の授業アセスメントでは、授業後に「家族への信頼」「学内友人への信頼」因子において有意な向上が見られ、「家族に対する不信」因子においても減少傾向が見られた。このことは授業がポジティブな自尊感情に向上に寄与することが示唆された。また、各因子の相関関係から、「家族のいのちについて考えたことがある」というライフイベントの経験がポジティブな各因子と有意な相関関係にあり、授業の中で家族を焦点化させたことの有効性も検証された。前回調査の仮説として、自尊感情に高校期は友人関係の影響が大きいであろうと考えたが、全体に関わるポジティブなかかわりの関連性因子は家族に関連したものであった。実際の教育現場で生徒らの言動を見ると、「友達にどう思われるか」という点に最大の関心が置かれているような印象を受ける。しかしながら前回の調査では、各質問の６つの方向性（自己を中心に、１，自分自身をどう思うか・２，家族をどう思うか・３，学内友人との関係・４，学外友人との関係・５，家族からどう思われていると思うか・６，周囲の人からどう思われていると思うか）の項目ごとに因子分析を行ったものである。そこで、全体で因子分析をすることで異なった結果となる可能性を考え、追加調査を行うこととした。

本研究は、以上のことをふまえて、高校生のかかわり尺度の精度を高めることと、自己肯定的とらえ方と否定的なとらえ方に、高校生の人とのかかわりがどうのように影響しているのかを追加調査して明らかにすることを目的とした。また、「いのちの教育」の今後の学習展開への一考としたい。

Ⅱ　対象と方法

１．対象

対象は、神奈川県内の高校９校各１クラスの350名を対象とし、地域の偏りがないように様々な生徒が網羅できるように配慮した。有効回答は292名、回収率88.5％であった。有効回答生徒の概要は表１に示した。

表１　有効回答生徒概要

	学年	人数	有効%	性別	人数	有効%
有効	1	106	36.3	男性	128	43.8
	2	133	45.5	女性	164	56.2
	3	53	18.2			
	合計	292	100.0	合計	292	100

２．調査方法

調査期間は2002年６月に担任教員指導のもとで調査を行った。調査用紙は、「高校生のかかわりと自尊感情２」調査に利用した「2001年度改訂版２」をさらに、因子負荷量が0.65以上の回答のみを採択して項目数を減らし、新たに質問項目間の関係性を問う質問を追加して「高校生のかかわりと自尊感情調査用紙３」を作成した。図１に示すように「自己」を中心に六つの方向性の質問と、相対化するためにRosenbergの自尊感情尺度日本語版（1980）を用いた。質問項目は、自分自身について20問、家族について19問、学内友人について13問、学外友人について14問、家族からどう思われているか12問、周囲からどう思われているか13問の計91問（回答は５件法）である。また新設の項目は表２に示す通り、C-1の“自分の存在について意味がある・無い”の強制二択法と、そのC

-1回答と設問６項目の関係性について尋ねた（回答は７件法）ＣⅡ１～６問と、ＣⅢの自己存在観に一番影響を与えている関係性を問う項目を追加した。

分析はSPSS 11.0を用いて、主因子法Promax回転によって分析を行った。また、統計処理のため否定的な設問は逆転項目とした。

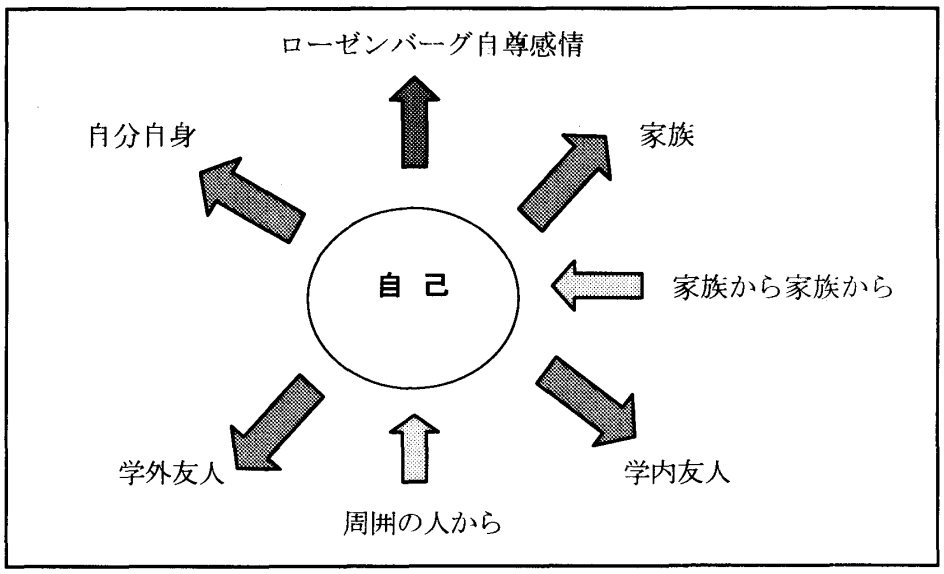

図１　高校生の関わりと自尊感情についての調査の質問紙構成

表２　新設項目　自分の存在に意味を持つ関係性とは？

C—1	CⅡ自分の存在観に対してどの程度影響を与えていますか		CⅢ存在観に影響してもの
あなたは自分に対してどう思いますか？ １：存在意味が無い ５：存在意味がある	①自分が家族をどう思うか	④学外の友人	自分の存在観に対して強い影響を与えている関係を６方向CⅡから選ぶ。
	②自分自身のとらえ方	⑤家族からどう思われているか	
	③学校の友人	⑥家族からどう思われているか	
強制２択法	１全く与えていない～４どちらとも～７非常に与えている（７件法）		３位まで順位づけ

Ⅲ　結果

１．Rosenbergの自尊感情

Rosenbergの自尊感情尺度の確認的因子分析をした結果、固有値1.3以上、因子負荷量が0.58以上である計８項目２因子（表３）を抽出した。前回の調査では、「否定的自尊感情」の下位項目であった“自分には自慢ができるところがない”（因子負荷量0.49）が、今回の調査では「肯定的自尊感情」の下位項目に加わった。このことからも肯定的な自尊感情の因子では、平均的な人並みを良しとする傾向が見られた。

表３　自尊感情因子分析結果

第１因子　肯定的自尊感情

		1	2
Ｉ１	少なくとも人並みには価値がある人間である	0.80	0.25
Ｉ２	色々な良い素質を持っている	0.85	0.29
Ｉ４	物事を人並みには、うまくやれる	0.70	0.17
Ｉ５	自分には自慢できるところがあまりない	0.62	0.45
Ｉ６	自分に対して肯定的	0.58	0.34

第２因子　否定的自尊感情

Ｉ３	敗北者だと思うことがよくある	0.27	0.64
Ｉ９	自分は全くダメ人間だと思うことがある	0.46	0.81
Ｉ10	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	0.56	0.70
	固有値	3.78	1.38
	寄与率	37.81	13.78
	累積寄与率	37.81	51.60

２．高校生のかかわり尺度

追加調査の因子分析では、Rosenbergの自尊感情尺度をのぞく、2001年度の調査と対応のある項目全体で主因子法プロマックス回転にて分析を行った。求められた因子は表４に示すように固有値1.1以上、因子負荷量0.6以上、Cronbach係数0.7以上の内的整合性のある16因子（累積寄与率65.98%）が求められた。16因子は、2001年度の調査とほぼ同様な因子分析結果となった。「いのちを考える経験」の因子は、前回では各一因子であった「学内友人のいのち」「学外友人のいのち」「周囲からのいのちの尊重」の因子が一つとして集約され「家族のいのちの尊重」は独立した因子となった。しかし、質問項目の自己認知領域の「自己のいのちの尊重」下位４項目の“自分の命を考えた”は、因子としてまとまらず、他の“自分のいのちを大切に思う、自分を大切に思う、自分が好き”項目が「自己肯定」の因子としてまとまった。このことは自分のいのちを考えることに対しての認識には個人差が大きく、学習においては、他者のいのちに焦点をおいて学習することが有効であることを示唆したと考えられた。

因子分析としての第１因子は、「家族からの尊重」で固有値16.3、寄与率17.9%、第二因子「学外友人への信頼」固有値9.5、寄与率10.4%を示し、この２因子で累計寄与率は28.3%で肯定的な関係性の11因子（46.84%）のうち、高い因子負荷量を示した。

全体の16因子累積寄与率65.98%の内、否定的な関係性の６因子の寄与率は20.43%で、支持している因子は、第３因子「家族からの蔑視・不信」固有値6.64、寄与率7.30%、第６因子「自信喪失」固有値2.87、寄与率3.15%、第８因子「周囲からの拒絶」第９因子「学外友人からの不信」第10因子「学内友人からの不信」第14因子「家族からの無関心」であった。

表４　因子分析結果

因子名と下位項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
家族からの尊重																
自分を心配してくれる	0.86	0.15	0.29	0.19	0.18	0.20	0.05	0.13	0.21	0.10	0.14	0.35	0.07	0.23	0.02	0.43
悪いことをしても力になってくれる	0.69	0.15	0.13	0.21	0.11	0.17	0.06	0.08	0.09	0.03	0.02	0.24	-0.04	-0.18	0.09	0.29
心配しているから怒ると思う	0.76	0.27	0.26	0.28	0.20	0.18	0.12	0.07	0.12	0.17	0.08	0.40	-0.09	0.03	0.26	0.23
最終的には信用してくれる	0.79	0.23	0.40	0.27	0.23	0.24	0.00	0.12	0.20	0.09	0.08	0.48	0.03	-0.02	0.24	0.43
私のことを考えて世話をしてくれる	0.77	0.20	0.21	0.17	0.12	0.15	0.07	0.03	0.08	0.12	0.14	0.35	0.00	0.06	0.16	0.28
家族が自分の命について考えている	0.77	0.18	0.11	0.26	0.09	0.24	0.35	-0.06	0.16	0.05	0.31	0.40	0.03	0.18	0.05	0.34
家族にとって自分の命は大切だと思う	0.81	0.14	0.18	0.24	0.10	0.27	0.25	-0.05	0.20	0.09	0.27	0.40	0.07	0.21	0.07	0.40
本当に困った時に助けてくれる	0.65	0.22	0.31	0.32	0.23	0.25	0.13	0.06	0.22	0.06	-0.03	0.49	-0.08	-0.29	0.36	0.54
学外友人への信頼																
学校以外の友人を大切に思う	0.22	0.79	0.08	0.36	0.43	-0.13	0.22	0.13	0.24	0.07	0.07	0.26	-0.07	0.05	0.16	0.24
一緒に遊んでいて楽しい	0.24	0.82	0.13	0.34	0.48	0.00	0.09	0.17	0.29	0.11	0.09	0.32	-0.01	0.03	0.16	0.15
悩み相談にのってくれる	0.21	0.86	0.05	0.40	0.31	-0.05	0.28	0.13	0.19	0.09	0.14	0.23	0.00	-0.07	0.13	0.18
自分の気持ちを理解してくれる	0.24	0.86	0.05	0.39	0.35	-0.01	0.24	0.19	0.19	0.12	0.14	0.27	-0.02	-0.06	0.15	0.17
意見や考えが合う	0.11	0.74	-0.02	0.31	0.25	-0.12	0.18	0.09	0.15	0.00	0.09	0.18	-0.09	-0.01	0.06	0.11
学校で嫌なことがあったら励まして	0.24	0.78	0.05	0.42	0.39	-0.07	0.41	0.13	0.19	0.11	0.13	0.27	-0.01	-0.14	0.17	0.25
家族からの蔑視・不信																
口うるさく文句を言う	0.14	-0.07	0.71	0.03	0.17	0.16	0.05	0.10	0.14	0.07	0.06	-0.04	0.24	0.04	0.15	0.08
必要以上に干渉する	0.05	0.02	0.68	0.10	0.27	0.15	-0.08	0.29	0.19	0.32	-0.08	0.15	0.29	0.08	0.11	0.14
兄弟や他人と比較する	0.29	0.12	0.67	0.06	-0.01	0.26	-0.13	0.13	0.21	0.15	0.01	0.10	0.21	0.19	0.18	0.17
直ぐに怒る	0.24	0.02	0.76	-0.06	-0.04	0.34	-0.11	0.15	0.19	0.19	-0.08	0.08	0.34	0.13	0.16	0.19
やつあたりをする	0.23	-0.03	0.74	0.00	0.05	0.39	-0.15	0.21	0.25	0.16	-0.12	0.15	0.29	0.07	0.16	0.12
バカにされる	0.40	0.14	0.60	0.07	0.08	0.35	-0.21	0.31	0.38	0.21	-0.07	0.34	0.22	0.30	0.05	0.28
自分の気持ちを分かってくれない	0.39	0.04	0.74	0.08	0.16	0.45	-0.03	0.29	0.38	0.30	-0.15	0.32	0.27	0.00	0.31	0.36
信用してくれない	0.47	0.16	0.67	0.13	0.07	0.38	-0.10	0.27	0.51	0.17	-0.08	0.44	0.20	0.16	0.22	0.43
周囲からの受容																
まわりの人に大切にされている	0.39	0.28	-0.02	0.70	0.36	0.10	0.33	0.17	0.19	0.09	0.32	0.12	0.10	-0.15	0.15	0.26
仲良く遊んでくれる	0.24	0.38	0.04	0.90	0.43	0.03	0.31	0.19	0.23	0.16	0.16	0.24	0.02	-0.14	0.19	0.21
悩みを聞いてくれる	0.25	0.43	-0.02	0.86	0.42	-0.06	0.41	0.15	0.12	0.16	0.18	0.25	0.04	-0.12	0.10	0.23
話しかけてくれる	0.24	0.34	0.07	0.86	0.43	0.00	0.28	0.21	0.16	0.14	0.15	0.24	-0.04	-0.07	0.18	0.16
メールや電話をくれる	0.14	0.32	0.01	0.79	0.38	-0.01	0.20	0.17	0.25	0.05	0.03	0.23	0.00	-0.06	0.15	0.13
頼りにしてくれる	0.23	0.33	-0.06	0.76	0.31	-0.01	0.33	0.22	0.04	0.01	0.30	0.18	0.01	-0.12	0.19	0.19
学内友人への信頼																
学校の友達を大切に思う	0.19	0.42	0.12	0.40	0.84	-0.03	0.28	0.20	0.22	0.33	0.09	0.16	0.09	0.02	0.17	0.12
友達と一緒に遊んでいて楽しい	0.22	0.33	0.13	0.39	0.91	0.07	0.23	0.24	0.24	0.26	0.09	0.17	0.08	-0.07	0.13	0.14
困ったとき助けてくれた	0.26	0.38	0.05	0.50	0.77	0.09	0.36	0.21	0.24	0.27	-0.01	0.19	0.04	-0.07	0.03	0.25
話しをしていて楽しい	0.25	0.31	0.13	0.42	0.88	0.14	0.25	0.23	0.28	0.33	0.14	0.21	0.10	-0.01	0.13	0.12
お互いに相談する	0.25	0.34	0.03	0.49	0.71	0.09	0.37	0.17	0.20	0.20	0.10	0.19	0.17	-0.11	0.08	0.23
自信喪失																
自分が嫌い	0.26	-0.01	0.32	0.03	0.02	0.76	0.11	0.18	0.12	0.28	0.33	0.11	0.26	0.03	0.16	0.08
外見に自信がない	0.04	-0.23	0.24	-0.03	-0.10	0.69	0.06	0.05	0.05	0.19	0.14	-0.01	0.29	0.17	0.09	0.04
精神的に苦しい	0.26	0.04	0.32	0.07	0.16	0.74	0.02	0.33	0.32	0.31	-0.06	0.23	0.23	-0.05	0.12	0.25
自分に自信がない	0.15	-0.10	0.24	-0.04	-0.01	0.84	-0.02	0.10	0.10	0.17	0.14	0.05	0.28	0.08	0.10	0.04
ちょっとした事で落ち込む	0.05	-0.04	0.31	0.01	0.09	0.62	-0.07	0.20	0.18	0.23	-0.01	0.20	0.35	0.04	0.21	-0.04
いのちを考える経験																
友達の命について考えた	0.14	0.14	-0.10	0.29	0.35	0.04	0.77	-0.01	-0.07	-0.09	0.18	0.21	-0.05	-0.15	-0.03	0.07
友達の命を大切だと思った	0.30	0.31	-0.02	0.41	0.39	0.16	0.74	0.12	0.09	0.16	0.15	0.36	-0.03	-0.18	-0.04	0.24
学校以外の友人の命を考えた	0.09	0.54	-0.04	0.22	0.21	-0.09	0.72	-0.05	-0.04	-0.01	0.25	0.28	-0.20	-0.17	0.03	0.15
学校以外の友人の命を大切に思う	0.20	0.60	-0.04	0.35	0.27	0.01	0.69	0.02	0.05	0.11	0.16	0.38	-0.16	-0.11	0.01	0.26
周囲の人は人の命を考えている	0.13	0.24	-0.03	0.49	0.29	0.01	0.76	0.14	-0.03	0.15	0.18	0.19	-0.02	-0.14	0.06	0.17
周囲の人は自分の命を大切だと	0.33	0.28	0.08	0.54	0.27	0.18	0.67	0.13	0.02	0.14	0.43	0.28	0.08	-0.18	0.08	0.20
周囲からの拒絶																
無理なお願いをされる	-0.01	0.17	0.30	-0.05	0.17	0.13	-0.02	0.60	0.23	0.24	-0.13	-0.09	0.09	0.28	-0.07	0.10
ムカツクことをされる	0.12	0.15	0.22	0.16	0.20	0.21	0.03	0.82	0.40	0.42	0.02	0.07	0.20	0.05	0.07	0.00
冷たい態度をとられる	0.06	0.08	0.17	0.14	0.17	0.17	-0.02	0.85	0.41	0.40	-0.06	0.06	0.25	0.12	0.01	0.03
助けてくれない	0.09	0.15	0.20	0.33	0.23	0.23	0.04	0.92	0.41	0.43	-0.05	0.06	0.21	0.21	0.04	0.19
自分の言い分を聞く気がない	0.06	0.13	0.20	0.27	0.21	0.18	-0.04	0.85	0.35	0.36	0.00	0.16	0.17	0.15	0.04	0.11
学外友人への不信																
人間関係が上手くいっていない	0.23	0.21	0.32	0.20	0.26	0.32	-0.10	0.44	0.69	0.31	0.05	0.21	0.29	0.03	0.18	0.09
約束を守らない	0.13	0.18	0.24	0.13	0.26	0.10	-0.07	0.44	0.78	0.37	-0.01	0.03	0.22	0.22	0.10	0.13
裏切られた	0.04	0.19	0.22	0.16	0.19	0.09	-0.12	0.43	0.73	0.36	-0.06	0.09	0.15	0.05	0.14	0.00
遊んでくれない	0.07	0.20	0.20	0.17	0.11	0.25	-0.14	0.34	0.73	0.33	-0.09	0.13	0.03	0.23	0.07	0.14

学内友人への不信																
学校の友達・学級友人を嫌だと思う	0.26	0.15	0.28	0.24	0.44	0.25	0.13	0.33	0.27	0.71	-0.02	0.13	0.19	0.10	0.08	0.09
自己中心的な人が居て迷惑だ	0.04	0.04	0.26	0.03	0.23	0.17	0.05	0.33	0.23	0.77	-0.06	-0.02	0.19	0.11	0.04	0.10
自分に対して嫌なことをする	0.17	0.16	0.23	0.16	0.21	0.23	0.03	0.47	0.36	0.79	0.00	0.12	0.16	0.17	0.06	0.17
悪口を言う	0.17	0.02	0.07	0.11	0.12	0.27	-0.16	0.31	0.40	0.72	0.10	0.03	0.07	0.13	-0.08	0.03
シカトする	0.23	0.12	0.17	0.19	0.28	0.20	-0.08	0.32	0.51	0.64	0.00	0.19	0.04	0.17	0.01	0.21
意見が合わない	0.23	-0.02	0.26	0.17	0.26	0.31	-0.07	0.44	0.36	0.60	-0.15	-0.01	0.11	-0.01	-0.04	0.08
自己肯定																
自分を大切に思う	0.34	0.27	0.09	0.21	-0.01	0.35	0.23	-0.01	-0.01	0.01	0.69	0.27	-0.05	-0.20	0.15	0.32
自分が好き	0.32	0.10	0.10	0.18	0.04	0.41	0.20	-0.01	0.06	0.09	0.71	0.26	0.09	-0.11	0.19	0.19
人には優しい	0.21	0.16	0.05	0.26	0.30	-0.06	0.16	0.00	0.08	0.10	0.61	0.16	0.29	-0.16	0.40	-0.13
家族のいのちの尊重																
家族の病気やケガを心配した	0.44	0.29	0.06	0.29	0.18	0.09	0.25	0.02	0.16	-0.01	0.10	0.77	-0.09	-0.11	0.14	0.21
家族の命について考えたことがある	0.36	0.24	0.01	0.22	0.09	0.12	0.39	-0.01	-0.02	-0.08	0.23	0.76	-0.17	-0.01	0.01	0.41
家族の命を大切に思った	0.46	0.26	0.11	0.25	0.11	0.21	0.38	0.05	0.10	0.03	0.16	0.82	-0.16	-0.03	0.01	0.43
自己否定																
他人を傷付けてしまう	0.11	0.02	0.38	0.10	0.07	0.36	-0.08	0.24	0.18	0.24	0.12	0.07	0.79	0.09	0.18	-0.01
ウソをついてしまう	0.21	-0.03	0.37	0.07	0.14	0.27	-0.08	0.27	0.23	0.12	-0.08	0.01	0.70	0.10	0.09	0.18
自分勝手である	0.09	-0.04	0.39	-0.05	0.06	0.41	0.06	0.11	0.07	0.22	0.22	-0.02	0.71	0.11	0.35	-0.07
家族からの無関心																
無関心で放任されている	0.35	0.09	0.24	0.05	0.04	0.20	-0.07	0.18	0.19	0.23	-0.08	0.14	0.12	0.74	-0.01	0.20
親は、家族を同居人だと考えている	0.31	0.13	0.29	0.05	0.18	0.11	-0.22	0.22	0.36	0.18	-0.23	0.32	0.06	0.61	0.09	0.24
自己努力																
何かに対して一生懸命頑張	0.21	0.18	0.10	0.21	0.12	0.11	0.01	0.06	0.16	0.01	0.24	0.17	0.07	-0.13	0.83	0.12
諦めずに物事をやり遂げる	0.24	0.19	0.19	0.26	0.14	0.24	0.04	0.04	0.18	0.07	0.28	0.22	0.23	-0.10	0.79	0.19
家族への信頼																
経済的に支援をしてくれる	0.38	0.19	0.21	0.19	0.18	0.09	0.06	0.09	0.16	0.14	0.11	0.30	-0.01	0.07	0.15	0.72
相談にのってくれる	0.51	0.13	0.34	0.27	0.13	0.24	0.25	0.04	0.20	0.02	-0.01	0.35	-0.11	-0.25	0.25	0.66
因子	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
固有値	16.30	9.46	6.64	4.35	3.18	2.87	2.74	2.30	2.03	1.83	1.59	1.53	1.43	1.33	1.28	1.19
寄与率（%）	17.92	10.40	7.30	4.78	3.50	3.15	3.01	2.53	2.23	2.01	1.75	1.68	1.57	1.46	1.40	1.30
累積寄与率（%）	17.92	28.32	35.61	40.39	43.89	47.04	50.05	52.58	54.81	56.82	58.57	60.25	61.82	63.28	64.68	65.98

3．因子間の相関

前回の調査では、６方向の質問項目ごとに因子分析を行ったが、その質問設定自体の有効性を確認するため今回は全体で因子分析を行い、さらに、因子間の相関分析をして確認を行い、またその項目ごとの関連性について検討した。その結果、第２因子「学外友人」と第５因子「学内友人」は相関係数0.97を示した。これは、これまでの調査では学内友人と学外友人に分け設問したが、回答する生徒らは学内友人と学外友人を友人として１つの因子として成立することが示唆された。因子として別れた理由としては、設問が項目ごとのまとまりとなっていたことが別の因子としてまとまったと推察される。前回の調査では「学内友人」「学外友人」因子双方が、肯定的・否定的自尊感情との因子相関及び重回帰分析の結果と及びほとんどの項目で有意な関係性がみられたが、「学内友人への不信」因子は、肯定的自尊感情との関係性は成立しなかった。今回の調査でもこの点は同様な結果となった。

次に16因子間関係性をみるためにPearson相関係数見ると、回答の最も多くの因子とかかわりを持つのは、第１因子「家族からの尊重」で14項目（１％水準で13項目５％水準で１項目）と有意な相関関係を示した（表５）。また、第２因子「学外友人への信頼」で高い値を示すものは、第７因子「いのちを考える経験」相関係数0.62と第４因子「周囲からの受容」相関係数0.55と特に高い相関があることが明らかになった。

否定的な関係性を示す第６因子「自信喪失」は、Rosenbergの自尊感情尺度の「否定的な自尊感情」との相関係数が0.55と最も高い値を示した。また、「自己否定」因子は「家族からの蔑視・不信」と0.87の高い係数を示した。

また、第７因子「いのちを考える経験」因子は、「学外友人の信頼」「周囲からの受容」「学内友人への信頼」「家族のいのちの尊重」の肯定的なかかわりの因子との相関が高く、人との肯定的なかかわりの認知を再度見直すためには、「いのちを考える経験」はいのちの学習の有効な学習のてだてであることが確認できた。

表５　各因子間の Pearson 相関係数

		IN1	IN2	IN3	IN4	IN5	IN6	IN7	IN8	IN9	IN10	IN11	IN12	IN13	IN14	IN15	IN16	Ｊ１	Ｊ２
IN1	家族からの尊重	1.00	0.26	0.34	0.29	0.25	0.17	0.26	0.04	0.11	0.19	0.49	0.51	0.41	0.39	0.25	0.59	0.30	0.18
IN2	学外友人への信頼	0.26	1.00	0.05	0.55	0.97	0.10	0.62	0.20	0.19	0.31	0.21	0.27	0.05	0.07	0.14	0.21	0.14	-0.03
IN3	家族からの蔑視・不信	0.34	0.05	1.00	0.01	0.09	0.40	-0.06	0.28	0.34	0.32	0.12	0.08	0.47	0.34	0.17	0.31	0.20	0.31
IN4	周囲からの受容	0.29	0.55	0.01	1.00	0.54	-0.03	0.52	0.19	0.19	0.16	0.28	0.28	0.04	0.02	0.24	0.25	0.20	0.02
IN5	学内友人への信頼	0.25	0.97	0.09	0.54	1.00	0.10	0.49	0.23	0.25	0.37	0.19	0.21	0.08	0.11	0.16	0.22	0.17	0.00
IN6	自信喪失	0.17	0.10	0.40	-0.03	0.10	1.00	0.03	0.24	0.25	0.32	0.30	0.06	0.40	0.16	0.18	0.11	0.40	0.55
IN7	いのちを考える経験	0.26	0.62	-0.06	0.52	0.49	0.03	1.00	0.09	0.01	0.08	0.28	0.51	-0.06	-0.08	0.08	0.26	0.04	-0.04
IN8	周囲からの拒絶	0.04	0.20	0.28	0.19	0.23	0.24	0.09	1.00	0.54	0.52	0.01	0.02	0.30	0.23	0.05	0.03	0.06	0.18
IN9	学外友人への不信	0.11	0.19	0.34	0.19	0.25	0.25	0.01	0.54	1.00	0.61	0.09	0.02	0.40	0.27	0.19	0.10	0.13	0.14
IN10	学内友人への不信	0.19	0.31	0.32	0.16	0.37	0.32	0.08	0.52	0.61	1.00	0.08	0.01	0.31	0.28	0.05	0.16	0.10	0.21
IN11	自己肯定	0.49	0.21	0.12	0.28	0.19	0.30	0.28	0.01	0.09	0.08	1.00	0.28	0.11	-0.08	0.41	0.29	0.60	0.39
IN12	家族のいのちの尊重	0.51	0.27	0.08	0.28	0.21	0.06	0.51	0.02	0.02	0.01	0.28	1.00	0.17	0.18	0.14	0.39	0.16	0.10
IN13	自己否定	0.41	0.05	0.47	0.04	0.08	0.40	-0.06	0.30	0.40	0.31	0.11	0.17	1.00	0.49	0.16	0.31	0.23	0.30
IN14	家族からの無関心	0.39	0.07	0.34	0.02	0.11	0.16	-0.08	0.23	0.27	0.28	-0.08	0.18	0.40	1.00	0.03	0.22	0.05	0.08
IN15	自己努力	0.25	0.14	0.17	0.24	0.16	0.18	0.08	0.05	0.19	0.05	0.41	0.14	0.16	0.03	1.00	0.27	0.39	0.25
IN16	家族への信頼	0.59	0.21	0.31	0.25	0.22	0.11	0.26	0.03	0.10	0.16	0.29	0.39	0.31	0.22	0.27	1.00	0.16	0.22
Ｊ１	肯定的自尊感情	0.30	0.14	0.20	0.20	0.17	0.40	0.04	0.06	0.13	0.10	0.60	0.16	0.23	0.05	0.39	0.16	1.00	0.46
Ｊ２	否定的自尊感情	0.18	-0.03	0.31	0.02	0.00	0.55	-0.04	0.18	0.14	0.21	0.39	0.10	0.30	0.08	0.25	0.22	0.46	1.00

相関係数４．５以上
相関係数３．５以上
相関係数は 1% 水準で有意（両側）
相関係数は 5% 水準で有意（両側）

４．クロス集計

有意な相関関係の認められた因子の関係性をクロス集計から確認を行った。因子ごとの下位項目５件法での回答平均を得点化した。その得点の全体集団平均値を求め、そこを中央値として標準偏差の１／２で区切り、３段階に区分した。３が平均より高い肯定的な回答群、２が平均的回答群、１が平均より低い否定的回答群を指している。

高い相関関係（係数0.55）を示した（この両項目及び否定項目は全て逆転項目の処理を行っている）第６因子「自信喪失」と「否定的自尊感情」でのクロス集計を見ると、表６が示すように自信喪失している人ほど、否定的な自尊感情を示すことが明らかとなっている。

表６　　第６因子：ＣＬ６「自信喪失」と Rosenberg 因子 JCL２「否定的自尊感情」

CL6 と JCL2 のクロス表

			JCL2			合計
			1	2	3	
CL6	1	度数	60	28	8	96
		CL6 の %	62.5%	29.2%	8.3%	100.0%
	2	度数	18	58	15	91
		CL6 の %	19.8%	63.7%	16.5%	100.0%
	3	度数	13	43	49	105
		CL6 の %	12.4%	41.0%	46.7%	100.0%
合計		度数	91	129	72	292
		CL6 の %	31.2%	44.2%	24.7%	100.0%

また、第６因子「自信喪失」と高い相関関係にある第３因子「家族からの蔑視・不信」とのクロス集計を行った。自信を喪失している者は、家族からの蔑視不信を感じており、反対に自信を喪失していない者は、家族からの蔑視不信を感じないという結果になった。

また次に、第３因子「家族からの蔑視・不信」との高い相関にある係数0.87を示す第13因子「自己否定」の項目とのクロス集計を表６に示した。「家族からの蔑視・不信」と、「自己否定」の相関は係数0.87の高い相関関係が見られ、表７からも見られるように、家族からの対応の認知によって、自己否定の認知に大きく影響があることが明らかとなり、反対に家族から蔑視・不信を感じない者は、自己否定を感ないという顕著な結果が得られた。

表７　第３因子：ＣＬ３「家族からの蔑視・不信」と　第 13 因子：CL13「自己否定」

CL3 と CL1 のクロス表

			CL1			合計
			1	2	3	
CL3	1	度数	46	22	25	93
		CL3 の %	49.5%	23.7%	26.9%	100.0%
	2	度数	29	38	27	94
		CL3 の %	30.9%	40.4%	28.7%	100.0%
	3	度数	15	45	45	105
		CL3 の %	14.3%	42.9%	42.9%	100.0%
合計		度数	90	105	97	292
		CL3 の %	30.8%	36.0%	33.2%	100.0%

第３因子「家族からの蔑視・不信」（逆転項目の処理を行っている）との相関関係は、否定的自尊感情を支持する因子であったが、第１因子「家族からの尊重」との相関が見られた。クロス集計でその詳細を見ると表８に示す通りであった。家族からの蔑視・不信を感じている49.5%の者が、家族から尊重されていないと感じており、反対に蔑視・不信を感じない者は、家族から尊重されていると感じていることが示された。

表８　第３因子：ＣＬ３「家族からの蔑視・不信」と第１因子 CL１「家族からの尊重」

CL3 と CL1 のクロス表

			CL1			合計
			1	2	3	
CL3	1	度数	46	22	25	93
		CL3 の %	49.5%	23.7%	26.9%	100.0%
	2	度数	29	38	27	94
		CL3 の %	30.9%	40.4%	28.7%	100.0%
	3	度数	15	45	45	105
		CL3 の %	14.3%	42.9%	42.9%	100.0%
合計		度数	90	105	97	292
		CL3 の %	30.8%	36.0%	33.2%	100.0%

追加した項目C-1“自己の存在意味がある、ない”の設問との関係では、従前の６方向の15因子（「家族からの無関心」を除く）と有意な相関があった（表９）。また、自己の存在価値にＣⅡ１～６の項目（従前の６つの方向）がどの程度の影響を与えていると考えますか、という問に対して、互いに0.35以上の中程度の相関係数を持ち総合的なかかわりから自己認識していることが明らかになった（表10）。またＣⅡ⑥「家族から自分がどう思われているか」⑤の「周囲から自分がどう思われているか」の項目は相関係数0.60の高い関連性を示した。

しかしＣⅢで、自分の存在観に対して強い影響を与えている関係を１～３位の順位付けする設問では、「学内友人」が明らかに決定要因になっていると生徒自身が考えていることが明らかになった。（表11）。

表９　C-1「存在価値あり・なし」とＣⅡ１～６の項目の関係性

分散分析表

			平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
ＣⅡ１ｘＣ―１	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	（結合）	64.599	1	64.599	33.845	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内		532.525	279	1.909		
	合計		597.125	280			
ＣⅡ２ｘＣ―１	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	（結合）	67.569	1	67.569	36.372	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内		518.303	279	1.858		
	合計		585.872	280			
ＣⅡ３ｘＣ―１	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	（結合）	30.711	1	30.711	16.136	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内		532.896	280	1.903		
	合計		563.606	281			
ＣⅡ４ｘＣ―１	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	（結合）	21.935	1	21.935	12.417	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内		494.636	280	1.767		
	合計		516.571	281			
ＣⅡ５ｘＣ―１	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	（結合）	33.803	1	33.803	16.012	.000
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内		591.122	280	2.111		
	合計		624.926	281			
ＣⅡ６ｘＣ―１	ｸﾞﾙｰﾌﾟ間	（結合）	17.873	1	17.873	9.657	.002
	ｸﾞﾙｰﾌﾟ内		516.348	279	1.851		
	合計		534.221	280			

表 10　ＣⅡ各項目の関係性

		ＣⅡ１	ＣⅡ２	ＣⅡ３	ＣⅡ４	ＣⅡ５	ＣⅡ６
ＣⅡ１	自分の家族	1.00	0.51	0.42	0.43	0.65	0.46
ＣⅡ２	自分自身	0.51	1.00	0.39	0.37	0.44	0.43
ＣⅡ３	学内の友人	0.42	0.39	1.00	0.52	0.45	0.48
ＣⅡ４	学外の友人	0.43	0.37	0.52	1.00	0.40	0.48
ＣⅡ５	家族から⇒自分	0.65	0.44	0.45	0.40	1.00	0.60
ＣⅡ６	周囲⇒自分	0.46	0.43	0.48	0.48	0.60	1.00

表 11　CⅢ「自分の存在観に対して強い影響を与えている関係を３位まで選ぶ」

	1番	2番	3番	4番	5番	6番
1位	学内友人	自⇒家族	自⇔自身	家族⇒自	学外友人	周囲⇒自
	24.7%	18.1%	17.7%	17.7%	15.5%	6.3%
2位	学内友人	学外友人	自⇔自身	家族⇒自	自⇒家族	周囲⇒自
	32.7%	16.6%	15.7%	13.5%	12.1%	9.4%
3位	学外友人	自⇔自身	学内友人	家族⇒自	周囲⇒自	自⇒家族
	21.4%	19.4%	17.5%	16.3%	14.3%	11.1%

そこで、これまでの結果から学内友人が否定的因子との関係が見られたことと合わせ、C-1の設問で「自分の存在意味はなし」(以下No群と記載)を選択した全回答者の13.7% 40名にあたる生徒の回答に注目した。このNo群が「学内友人」と「自分が家族をどう思うか」の２項目に関してクロス集計にて関係性をみた（表12)。

また表13に示すように、No群が、「自分が家族をどう思うか」の項目で40%が“４、どちらとも言えない”を選択し“5,～7,非常に与えている”を選択したのは、28.2%であった。それに対し「学内友人」の項目では、“４、どちらとも言えない”を選択したのは25%“5,～7,非常に与えている”を選択したのは40%である。このことは、否定的な自己存在観を持つ生徒には、学内友人が大きな要因として認知されていることが明かとなった。また、No群の特徴としてYes群に比べ１～３の回答を選ぶ者が多いことも注目すべきことである。これは、否定的な存在観を持ちながらも、決定要因としての関係性を理由づけられない、という側面を持つことが示唆された。

表 12　C-1　自己の存在意味　1,なし　5,あり　と「学内友人」因子

クロス表

			CⅡ3 学校の友人							合計
			1	2	3	4	5	6	7	
C—1	1	度数	4	5	5	10	8	3	5	40
		C — 1	10.0%	12.5%	12.5%	25.0%	20.0%	7.5%	12.5%	100.0%
	5	度数	2	4	19	65	68	46	38	242
		C — 1	.8%	1.7%	7.9%	26.9%	28.1%	19.0%	15.7%	100.0%
合計		度数	6	9	24	75	76	49	43	282
		C — 1	2.1%	3.2%	8.5%	26.6%	27.0%	17.4%	15.2%	100.0%

表 13　C-1 回答群別　C Ⅱ各項目がどの程度影響を与えているか　クロス集計

C-Ⅰ回答	関係する項目	4，どちらとも言えない	5~7：与えている	1~3 関与してない
No　群	自分⇒家族	41.0　%	28.2　%	30.8　%
	学内友人	25.0　%	40.0　%	35.0　%
Yes　群	自分⇒家族	21.5　%	70.7　%	7.8　%
	学内友人	26.9　%	62.8　%	10.3　%

Ⅳ　考察

1．これまでの調査結果から

本研究は、これまでの「高校生の人とかかわり」に注目して、健康教育の立場から「いのちの教育」の有効性や、いのちの学習の課題を探るものである。前回の調査では、肯定的な自尊感情に他者としてのかかわりが深い（重回帰分析の結果）のは、「学内外の友達」よりも「家族からどう思われているか」「周囲からどう思われているか」という項目であった。また、「いのちを考える」講座受講者に授業前後での比較検討した結果、「家族の信頼」「学内友人への信頼」因子も有意に高まった。「家族に対する不信」因子も信頼傾向へと変化が見られたことと授業観察からも授業の有効性が示唆された。しかし、かかわりの項目ごとの関連は検討できなかった。また、友人を重視している高校生徒の実態[4)5)]を説明するには十分な検討方法ではなかった。そこで追加調査を実施し生徒自身が重要とするかかわりの側面からも検討を行うことを目的とした。

2．「高校生のかかわり尺度」

本調査結果から「高校生のかかわり尺度」は、質問項目全体の91項目から因子分析をした結果16因子を抽出することができ、累積寄与率も65.98%が得られ内的整合性もみられ、高校生の対人認知をアセスメントする尺度として十分な尺度であると考えられた。この16因子は前回の調査をほぼ支持する結果であった。しかしながら、「学内友人への信頼」「学外友人への信頼」は同一方向の設問設定であったことが示唆された。今後は一つの方向としての設問設定とすることが望ましいが、「学内友人への不信」因子は「学内友人への不信と」と関係性は高いが明らかに違う因子としてまとまったことを考慮にいれる必要があると考える。従って、否定的なかかわりについては学内の友人の影響を受けていると推察された。

２回の調査から肯定的なかかわりの因子としては、「家族からの尊重」が最も大きな因子であり、各個人の認知に関わる部分に「いのちの学習」の要点が見いだされた。また追加調査では「自己のいのちの尊重」因子は成立せず、この事は一つには他者のいのちに学習の焦点を置くことの示唆と、家族のいのちを考える有効性を前回調査から確認されたことを支持し、現在の「いのちを考える」授業の焦点の有効性を支持した。

否定的なかかわりの因子としては、「家族からの蔑視・不信」が「自己否定」「自信喪失」と高い相関関係にあり、同時にRosenbergの自尊感情尺度の「否定的自尊感情」因子との高い相関関係にあった。高校期の人とのかかわり認知には、『家族からどう思われている』かという認知が、肯定的否定的なかかわりの双方に大きな影響をもたらしている[6)7)]ことが前回と同様に明らかとなった。

3．「Rosenberg の自尊感情尺度」と自尊感情・自己存在感の規定要因

これまで自尊感情が、人とのかかわりにおいて重要な要因であることが先行研究からも報告されている。[8)9)10)11)]そこで、先行研究と比較検討するために「高校生の人とのかかわり尺度」を開発する一方、相対化するためにRosenbergの自尊感情尺度を用いてきた。しかしながら、これまで自尊感情の決定要因は従前報告の一因子構造にはならず、筆者が高校生を対象とした調査（第一報・第二報及び、関連調査）述べ約3000人の各調査でも二因子構造となった。自尊感情は多様な成育経験や家庭環境などによって高校期までにある一定の概念を持ち、当然ながら友人関係や家族以外の他者との関係も作用していると考えられる。思春期に入りこれまでの親子関係とは違った関係性にな

ると同時に、友人関係が絶対であるように考えがちな中高生だが、自尊感情に関係する調査結果からは、家族関係の問題が自尊感情の規定要因になっていることが２回の調査結果から示唆された。

しかし高校生は、自己存在の価値観についての問に対して決定要因は友人であると答えている。各個人が重要視している関係性の側面をRosenbergの自尊感情尺度で高い低いとの一方向で分析することには限界がある。溝上[12)13)14)]は個性記述的方法（ＷＨＹ答法、文章完成法など）の重要な側面を自ら表出させる手法を提唱しこの点について言及している。自尊感情と自己評価の関係性について改めての検討が必要性であろう。但し今回の調査で、高校生は日常の友人とのかかわりに自己の存在意味(価値)の規定要因をおいていており、Ｃ-1のNo群Yes群共に友人は高い比率を示し、Yes群では、友人より家族の影響が強いと評価している。従って、友人（特に学内友人）に関しては、否定的なかかわりに影響していることが考えられた。高校生の生活活動時間の多くが学校内で過ごされることを考えると当然とも言えるであろう。従って、否定的なライフイベントが起こった祭に、高校生の友人に集中注目しがちな関係に対し、家族との繋がりや周囲との繋がりなど、他の関係性へ眼を向ける支援が必要であると考えられる。先行研究[4)5)]でも、この20年間で学外友人との接触頻度が低下していることが報告され、学内の友人との関係性にことさら注目が行く結果となっていることが推察される。従って、教育機関としては、思春期の発達発育[15)]の観点からも、高校期に教科教育以外に「いのちの学習」などを通して直接的な人とのかかわりのライフスキルを養う教育支援の重要性[16)17)18)]を示唆したものと考えられる。

また、Ｃ-1でのNo群の特徴として、回答の１～３『関与しない』が高いことである。No群の生徒達らは否定的な要因を特定せず理由は不明ながら、無関心・非探求的になっている。このような生徒にとってどの様な支援ができるのかが、教育現場で今後の課題となってくるであろう。高井[19)20)]は、継続した中高年の生き方調査から青年期からの対人関係に注目し、自己受容や自尊感情の青年期における獲得の重要性を示唆している。このことからも高等学校でも集団の特性を捉えた指導支援がさらに検討されるべきだと考えられる。

Rosenbergの自尊感情尺度で、「肯定的な自尊感情」因子の下位項目として、“自慢できることがあまり無い”が加わった。この結果は研究者が教育現場で、日々日の当たりにする生徒の動向と一致する面もある。思春期の生徒の多くは、目立つことを嫌い、同調を好み「みんなが…」が決まり文句であるかのようで、とにかく仲間から批判されることを極度に恐れる、といった印象を受ける。そうした日常の様子から考えると“自慢できることが無い＝ふつう”は精神的な安定をもたらしているのかも知れない。また、外山・桜井[21)]は、日本人は平均的であることを好む、文化的背景について言及しており、遠藤[22)]も日本人の文化との関係と自己を卑下的に見る傾向を指摘している。

Ｖ　今後の課題と展望

本研究では友人の関係を、校内友人・校外友人と分けて項目設定をしてきたが、生徒達には肯定的関係性の認知としては校内外の区別をしていないことが明らかとなり、質問項目数のストレスから考慮すると、否定的なかかわりの側面から考慮しても同一項目として十分扱うことがきると考えられた。また加えて、本調査Ｃ-1のNo群の13.7％（１クラス５名程度の試算）の生徒に対する教育的支援の具体的アプローチの課題である。これまで展開してきた「いのちを考える」講座は自由選択であるため、人とのかかわりに消極的になっている生徒が選択する割合は低いと考えられることからも、積極的な教育支援が必要になっていると考える。しかし、必要なのはNo群に対しての特別

プログラムというものでなく、学級全体で取り組みがされ、その友人や集団の関係性から自然と生徒自身が体得できるようなライフスキルモデル[3]であり、かかわり合いの経験の場の提供であると考える。

従って重要な支援とは、①多様な価値観を提示し受け入れられる支援をする、②かかわりの関係性を広い視野で捉えられるような、異年齢や社会の一員としての視点を養わせる。③多様なかかわりの場を提供する、以上の３点に整理され、教師は思春期の発達発育の特徴をベースとした教科外のかかわりと支援が望まれていると考えられる。

Ⅵ　文　献

1）大宮美智枝：高等学校における「生教育」の実践．東海大学健康科学部紀要、Vol. 6、2000、p41-50.

2）大宮美智枝・清水安夫：高等学校における「いのちの教育」の研究Ⅱ．日本健康心理学会第15回大会、発表論文集，2002、p364-365.

3）大宮美智枝・落合優：高等学校における「いのちの教育」の研究・第１報．横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ、５，2002、P117-136.

4）(財)日本青少年研究所：高校生の未来意識に関する調査平成14年度、ニュースレター、vol26、2002.

5）(財)日本青少年研究所：新千年生活と意識に関する調査平成13年度、ニュースレター、vol25、2001.

6）福岡欣治・橋本宰：大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係、教育心理学研究，43，1995、p 185-193.

7）福岡欣治・橋本宰：大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果、心理学研究，68，1997、p 403-409.

8）小塩真司：青年期の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連、教育心理学研究、Vol46、1998、p280-290.

9）小塩真司：自己愛傾向に関する基礎的研究―自尊感情、社会的望ましさとの関連―名古屋大学教育学部紀要（心理学），1999，p 155-163.

10）浦光　博：適応及び自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果．実験社会心理学研究，39，2000、p 121-134

11）蘭千尋・遠藤辰雄・井上祥治編：セルフ・エスティームの形成と養育行動、セルフ・エスティームの心理学、ナカニシヤ出版、1992.

12）溝上慎一：自己評価の規定要因とSELF-ESTEEMとの関係、教育心理学研究、45、1997、p67-70.

13）溝上慎一：ＷＨＹ答法による将来の生き方基底、心理学研究、66、1995、p367-372.

14）溝上慎一：中・高・大学生における自己受容の様相とその構造、日本青年心理学会第３回発表論文集、1995、p31-32.

15）E.・H・エリクソン（小此木啓吾訳）：自我同一性、誠信書房、1974.

16）岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二：中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果、教育心理学、41、1993、p302-312.

17）橋本秀美：適切な対人関係を築く学校教育．児童心理，1，2002、p 50-54.

18）神藤貴昭：中学生の学業ストレッサーと対処法略がストレス反応および自己成長感・学習意欲

に与える影響、教育心理学、46、1998、 p 442-451.
19) 高井範子：対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究、教育心理学研究、Vol47、1999、pp317-327.
20) 高井範子:「自己の存在価値意識」に関する研究、日本教育心理学会第40回総会発表論文集、1998b、p144.
21) 外山美樹・桜井茂男：自己認知と精神的健康の関係、教育心理学研究、Vol48、2000、pp454-461.
22) 遠藤由美:精神的健康の指標としての自己をめぐる議論、社会心理学研究、11, 1995、p 134-144.